研究ノート

体育教師の職能発達に影響を及ぼす要因に関する研究

――他者との関係性に着目して――

阿　部　隆　行

東京国際大学論叢　人間科学・複合領域研究　第５号　抜刷
2020 年（令和２年）３月 20 日

研究ノート

体育教師の職能発達に影響を及ぼす要因に関する研究
――他者との関係性に着目して――

阿　部　隆　行

A Study of Factors Affecting the Professional Development of Physical Education Teachers: A Focus on the Relationship with Other People

ABE, Takayuki

Abstract

The purpose of this research is to review studies on the professional development of physical education (PE) teachers and to understand the effects of their relationship with other people in the PE field. The results indicate that these other people could be categorized into three groups: learners, colleagues, and external human resources.
Further, the following three points were clarified: 1) The roles of other people in the professional development of PE teachers were identified as “support-supported” and “good rivals.” 2) When other people played a role in the professional development of a PE teacher, they were recognized as “heterogeneous others” due to differences in values and other attributes. 3) Through PE classes and dialogues centered on learners, the relationship between the PE teacher and the others transformed, and they came to be recognized as “heterogeneous collaborative others.”

Key Words: physical education teacher, professional development, relationship between PE teachers and others, literature review

キーワード：体育教師，職能発達，他者との関係性，文献研究

目　次

1. 緒言
2. 他者の属性について
　2.1　学習者
　2.2　同僚教師
　2.3　分析方法
3. 他者との関係性について
4. まとめ

1. 緒　言

少子高齢化，高度情報化などの社会の急激な変化に伴い，学校教育に求められる人材育成像が変化し続けている。国立教育政策研究所（2013）は，次世代に求められるものを「21世紀型能力」として，言語スキル，数量スキル，情報スキルなどの「基礎力」に加え，問題解決･発見力･創造力，論理的・批判的思考力，メタ認知・適応的学習力といった「思考力」や，自律的活動力，人間関係形成力，社会参画力，持続可能な未来づくりへの責任などの「実践力」を提案している。このような流れの中で，子どもたちが，何を知っているか，何ができるかという「個別の知識・技能」だけではなく，知っていること・できることをどう使うかという「思考力・判断力・表現力等」，どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るかという「学びに向かう力，人間性等」など情意・態度等に関わるものの全てを，いかに総合的に育んでいくかが重要である（中央教育審議会，2015：文部科学省，2017）とされている。このような育成すべき資質･能力を育むためには，学びの量とともに，質や深まりが重要であり（中央教育審議会，2015），「アクティブ･ラーニング」や「主体的・対話的で深い学び」など学び方や授業改善の視点についても議論（中央教育審議会，2015；山崎，2017；平野，2017）がなされてきた。

こうした次世代の教育に求められる資質・能力や学び方の変化に伴い，それを支える教師像にも変化が求められてきている。中央教育審議会（2012）は，学び続ける教員像の確立や教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力の重要性を提言し，「論点整理」（中央教育審議会，2015）の中で，「教員自身が習得・活用・探究といった学習過程全体を見渡し，個々の内容事項を指導することによって育まれる思考力，判断力，表現力等を自覚的に認識しながら，子供たちの変化等を踏まえつつ自ら指導方法を不断に見直し，改善していくことが求められる」と述べている。教職生活全体を通じた教師の職能成長の重要性が叫ばれるようになり，「Continuing Professional Development」（CPD：生涯を通じた継続的な専門職としての職能発達）という言葉が使われるようになった（Armour & Yelling, 2004；木原，2010）。さらに，教師の職能発達の捉え方については，「教師トレーニング」から「教師の成長」へ（岡崎・岡崎；1997）と変容し，それに伴い教師の成長モデルも「技術的熟達者モデル」から教育活動の中で省察，反省することを通して自らの資質・指導力を向上させるという「反省的実践家モデル」へと変化してきてきた（佐藤，1997；久保ら，2008；久保ら，2013；森，2009）。この「反省的実践家モデル」における教師の職能発達には，様々な出会いの場の違いがあるものの，他者の存在が重要であることが具体的な出会いの場面から明らかにされてきた（Stroot & Ko, 2007；住本，2013；朝倉ら，2012；須甲，2008；鈴木，2009）が，その関係性までは検討されておらず，一般化をみていない。そこで本研究では，体育教師の職能

発達に関わる研究を，職能発達の要因としての他者の役割や，他者との関係性に着目して整理することを目的とした。

2. 他者の属性について

論文の収集にあたっては，「CiNii」（国立情報学研究所論文情報ナビゲータ）及び月刊誌「体育科教育」を参照した。「CiNii」の検索のキーワードは，「体育教師」を必ず含むようにし，検索された論文のタイトルや概要を参照した上で，「体育教師の職能発達に影響を及ぼす要因としての他者」の視点から論文を抽出した。抽出した論文を他者の属性で分類したところ，「学習者」，「同僚教師」，「外部人材」という3つの属性に分類された。抽出した論文では「学習者」を表す語として，学校種や発育段階の違いなどにより「子供」，「子ども」，「児童」，「生徒」，「学習者」などが挙げられたが，本稿では「学習者」と統一して表記することとした。

2.1　学習者

加登本（2014）は，指導計画を立案する際に，「研究授業の慣例」や「学校行事からの要請」に支配され，「伝統的な指導法」を用いた授業を計画したが，伸び悩む学習者を前に葛藤を抱えることとなったと述べている。木原（2013）は，初任校において，教師がよいと思って設定した目標に即して技能を練習させ，その技能ができるようになった時に，ある学習者が，「もうこれで練習しなくいい」と言ったことにショックを受け，体育指導の在り方を問い直され，体育授業の運動技能中心の目標や評価を見直すなど，体育授業観の形成や変容の契機となったとしている。また，加賀（2006）は，教師が，学習者の「運動嫌い」や「体育嫌い」の要因が，一斉指導，体力や技能を強調した授業形態や評価にあるのではないかと考え，「嫌い」への対応として，「集団の中で自信を持たせるようにする」，「技能向上のヒントを与える」，「運動遂行の課程や結果において励ましをする」，「肯定的に賞賛する」，「必要性やねらいを説明する」という対応が取られていると述べている。朝倉（2010）は，コミュニケーション能力が低い生徒への関わりを通して「信念」を強化するとし，深見（2004）は，「学習成果の高い教師は，様々な失敗や『出来事（class events）』の経験から学ぶ力の優れている」ことを導き出し，「学習成果の高い教師は，教材との間に生起する子どもの『つまずき』を類型化するようになり，子どもにつまずきを生起させない学習過程の立案を重要視するようになった」と述べている。

これらのことから，伸び悩む学習者，運動嫌い・体育嫌いの学習者などの学習活動を展開する上で，指導上困難を抱える学習者が「被支援者」，体育教師が「支援者」となり，授業準備や教材研究，授業中の関わり，省察を通して授業力を向上させていることが明らかとなった。また，明石ら（2015）は，学習者が一生懸命運動に取り組んでいる姿をみることによって励まされ研究意欲が増すとしていることからも，指導上困難を抱える学習者と出会い，その学習者の学びを支援しようとすることで体育教師の職能発達が促進されることが示唆された。

2.2　同僚教師

塚田（1997）は，キャリアの節目に際して，同僚教師から多大な影響を受けていたことを明らかにした。また，阿部（2013b）は，その学校特有の文化の中で体育教師に求められている役割を演じる上でのロールモデルとなり得る同僚教師と出会うことで，自己の指導観を変容させると述べている。同僚教師が成長に影響を及ぼすことが考えられ，どのような同僚教師に巡り合うかが，

その後の職能発達の方向性に多大な影響を及ぼすということが指摘されている。

木原（2013）は，初任期の教師の職能発達に影響を与える要因として，熟練した教師のよい授業モデルを同僚教師や管理職等のメンターからの支援を挙げているが，小学校では，体育授業に関する対話や授業研究を日常的に行う同僚を校内で見つけにくいため，市の教育研究会体育部会など校外の仲間集団が体育授業観の形成や変容の契機となるとも述べている。また，明石（2015）は，校外の体育科を研究する先輩教師との出会いがあったことが体育科研究に影響を与えていて，研究組織で出会う他校の先輩教師の教職観に触れ，新しい環境での学びの再構築がなされ，自己の成長要求を生み出すサイクル生まれると述べている。これは，小学校教師が体育科授業研究に求める機能として，「教科内容追究」よりも「同僚性･関わり」が重視される（鈴木, 2010）ことや，「他の教師とのつながり」を作り，つながりを持った他の教師が実践している「具体的な実践事例を知る」（村井ら，2011）ことなどと報告していることから見ても，授業研究会で出会う同僚教師が，教師の職能発達に与える影響は大きいと言える。

しかしながら，須甲（2013）は，同僚教師との関係性は，授業の省察を通した信念の形成の際に阻害要因にもなると指摘しており，教師の職能発達にとって，同僚教師は，促進要因と阻害要因の二面性があると示唆された。また，品田（2018）は，研修の機能を充実させるためには，同僚教師や職場の上司が，「力が育つ場を意図して準備すること」が重要であるとしている。授業研究会の位置づけが，単に知識の伝達や，参加して他者と出会うだけでは十分とは言えず，同僚教師との関係性を深められるような体系を構築することが，教師の職能発達にとっては重要である。

小学校体育教師の職業的社会化という視点から，鈴木（2009）は，「教師は授業研究の場において実践的力量を向上させながら社会化していくためには，研修が親和的な同僚性を持つ集団で行われるというよりはむしろ，厳しい視点で事象を見つめながら行われる必要がある」と述べている。また，鈴木（2016）は，「教師の成長や変容を支える原動力となるのは，授業研究会における研究仲間であり，自分の授業観や児童観にぶつかってくるような他者であった。自分を授業というフィルターを通してさらけ出し，そこで他者から評価を受ける行為は，教師としての成長はもとより，素の自分を成長させるものなのである」と述べている。横山ら（2014）は，高校の体育教師が，小学校や中学校の教師との学校種を超えた授業研究会への参加を通して，同校種同士では流されてしまうような話題も，きちんと疑問点として話し合いをし，その本当の意味や意義を改めて考え，再認識したり，関わりを通して授業観や学習者観が変容し，生徒の状況を把握したり，適切な言葉かけをすることができるようになったと述べている。これらのことから，授業研究会を通した職能発達のためには，力が育つ場を意図的に設定し，そこで出会った同僚教師に対し，体育授業というフィルターを通して自分をさらけ出し，お互いの授業観などをぶつけ合い，共に成長していく「良きライバル」である他者が必要であることが示唆された。

一方，高等学校の体育教師は，部活動や授業以外の校務の経験などから専門的力量を向上させようとしているものの，授業研究会が充実していないことや，大学や教員研修センターなどが行う授業力向上のための研修にも参加していないという実態を挙げている（阿部，2013b）ことから，授業研究会で，成長に影響を与える他者に出会う機会は少ないと思われる。明石ら（2015）は，体育教師が体育科研究組織のリーダーになりつつある中で，他の教員をサポートしていこうとする意志が生まれ，彼らに研修の機会を提供することで自分自身の体育に関わる力量も向上していくとしている。また，明石ら（2015）は，熟練期の教員が，若い世代への体育指導の力量を引き継ごうとする意志をもっていて，学校内でおかれたそれぞれの立場から体育科研究について考えており，体育科研究の価値を感じ続けている。体力がなくなり，見本を見せるような体育指導は

できないが，年齢に応じた指導のあり方を考えるようになると述べていることから，中堅期や熟練期の体育教師が有する，他の教員をサポートしていこうという意志や，若い世代へ体育指導の力量を引き継ごうとする意志を意図的に引き出すような授業研究会等の研修が求められる。

2.3　外部人材

教師の職能発達に影響を与える他者は，学習者や同僚教師だけではない。鈴木（2016a）は，若手の体育教師は，授業研究会の外部講師などの「指導者からの評価」を求めることで，自己のアイデンティティを確立していると述べている。また，木原（2013）は，教員の長期研修において出会った指導主事の適切な支援により，それまで自己流で行っていた授業が，理論的に整理されて自信の裏付けとなって授業研究の成果が上がり，体育授業観を確立したと述べている。山口（2011）は，大学教員が介入して実験授業を実施した結果，教師が捉える学習者のつまずきの変容や，技能特性の捉え方や指導方法に変容が見られたと述べている。また，加登本（2014）は，「研究者との協働」により，多様な指導法に関する知識の学習や児童のつまずきの科学的分析を通して，水泳の目標を問い直し，「脱力し呼吸を確保しながら続けて長く泳ぐこと」を意図とした授業へと指導計画を再構成することができたと報告している。

朝倉ら（2012）は，長期研修における大学の指導教員との対話や批判的検討が，体育授業の認識変容にとって重要なジレンマの生起や克服を導き，運動が得意な学習者が不得意な学習者へ知識・技術を伝達する「教え合い」を中心とする学習観から，「学び合い」を中心とする学習活動へと変容したとしている。鈴木（2016b）は，外部講師の存在意義について，「学習指導要領の『伝達者』であるだけでなく，むしろ学習指導要領に対する教師に多様な価値や解釈を提供し，よりよい実現に向けた可能性をもたらしていく『媒介者』である」としている。

梅澤（2015）によると，保護者への一方向的な「説明」レベルでは専門職的アカウンタビリティを十分に果たしているとはいえない。教師が保護者ニーズに応じる姿勢を有することは，教師自身が気づかない知見を得られることになると考えられる。また，教師は保護者ニーズに加え，専門性を生かした実践を再構築することで保護者との合意形成に向けた連携が可能になる。教師が専門性を高めるためには，同僚教師らとのアカウンタビリティに向けた相互的な専門職的アプローチが重要になると考えられる。また，指導的立場にある教員は，教員生活21年目以降，校内だけでなく保護者も含めた地域のネットワークのなかでその力量を高めていく傾向があると加登本ら（2016）は，述べている。

体育教師が，外部人材と対話をする際には，立場や背景の違い等から，最初は「異質な他者」として認識しているが，外部教育人材が，体育教師のニーズに応じたり，相手の土俵に立って対話をしたりするようになり，体育教師自身が気付いていなかった視点について，再認識することができるようになる。また，外部人材が，体育教師に寄り添うような協働的な活動により，外部人材が「支援者」，体育教師が「被支援者」となっている状況が見られた。これまでの学習指導法や学習者理解について，多様な角度から理論的に整理し，共に課題を解決しようとする「異質協働的な他者」へと変容することが明らかになった。

3. 他者との関係性について

体育教師の職能発達に影響を与える要因としての他者を，「学習者」，「同僚教師」，「外部人材」の3類型に整理することができた。他者の属性に関係なく，その関係性に着目して再検討してみた

ところ，体育授業や授業研究会においては，体育教師が支援者で，他者が被支援者となる場合や，逆に，他者が支援者で体育教師が被支援者となる場合が見られた。これらを「支援－被支援」の関係性であるとした。また，体育授業づくりを通した職能発達のためには，体育教師と他者がお互いに価値観をぶつけ，刺激し認め合うような「良きライバル」の関係性が重要であることが整理された。また，職能発達に影響を及ぼす他者とは，必ずしも最初から良好の関係であったわけではなく，属性が異なったり，異なる指導観を有したりしている「異質な他者」という存在であった。しかしながら，最初は「異質な他者」であった関係性が，体育授業の指導に困難を抱える学習者のことを中心とした対話を通して，ともにより良い授業を作り上げていこうとする「異質協働的な他者」へと関係性を変容していくという実態も明らかとなった。この「異質な他者」から「異質協働的な他者」への関係性の変容について，香川（2015）は，「異なるコミュニティの人々が出会い，交流し，互いの重なりや共有部分を創出する一方で，文化的，歴史的に生じた互いの差異を単純に解消すべき悪者とするのではなく，むしろ変化の重要な原動力として生かす実践」が重要であり，そのことを「越境的な対話や学習」と定義している。教職生活の中で出会った「異質な他者」のことを，ともにより良い体育授業を創り上げていく「異質協働的な他者」へと捉えるようになるといった他者との関係性を変容させていくことが，体育教師にとっての職能発達の一側面であると捉えることができた。

教師教育に関しては，教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策（中央教育審議会，2012）の提言，学び続ける教員の必要性（中央教育審議会，2012），「Continuing Professional Development」（CPD：生涯を通じた継続的な専門職としての職能発達）の重要性（Armour & Yelling，2004）など教職生活全体を通じた教師の成長の重要性が叫ばれている。しかしながら，大量退職，大量採用時代を迎え，ロールモデルとなり得る熟練期の体育教師は少なくなることが懸念されている。教職生活全体にわたった職能発達として捉えた場合，体育教師がその教師生活の中で，どのような他者と出会い，その関係性がどのように変容していくかを明らかにしていくことは，生涯にわたって学び続ける教師を育成する支援をするためには必要不可欠である。また，中央教育審議会（2015）は，「学校と家庭，地域との連携・協働によって，共に子供の成長を支えていく体制を作ることで，学校や教員が教育活動に重点を置いて取り組むことができるようすることが重要である」として，「チームとしての学校」の在り方について検討してきた。また，2017年に公示された学習指導要領（文部科学省，2017）では，教科横断的な視点に立つ「カリキュラム・マネジメント」や「社会に開かれた教育課程」などが重視されている。教師が個別に成長していくのではなく，学校や地域といったコミュニティの中で，他者との関係性の変容を通して成長していくことが求められるであろう。

4. まとめ

本研究では，体育教師の職能発達に影響を及ぼす要因について他者を視点として整理し，他者との関係性を明らかにするため，体育教師の職能発達に関する研究をレビューした。その結果，文献は大きく（1）学習者，（2）同僚教師，（3）外部人材の3つの属性に分類された。さらに，他者との関係性の視点から検討した結果，以下のことが明らかになった。

1）体育教師の職能発達に影響を及ぼす要因としての他者との関係性は，「支援－被支援」，「良きライバル」の関係であった。

2）体育教師は，職能発達に影響を及ぼす他者と出会った当初，他者について価値観や属性の相

違などから「異質な他者」として認識していた。

3）体育教師と他者は，体育授業や学習者のことを中心とした対話を通して，「異質な他者」から「異質協働的な他者」へと関係性を変容させていった。

教師の成長の概念に関して，飯野（2010）は，教師対学習者という教師－学習者の一方的な関係性の変化ではなく，教師をコミュニティの一員として捉え，その教師が所属するコミュニティの変容や発展を教師の成長として捉えることができるとしている。また，香川（2015）は，自己が所属する組織を超える越境的な対話や学習の過程では，「新たな諸資源やコミュニティ間関係の創造だけでなく，主体の変容も同時に起こる。互いにとっての異文化に触れあうことで，個々人のそれまでの振る舞いや『これが当たり前』という思い込みを自覚化・相対化し，互いに揺さぶりあい，崩し，硬直した集団文化に変化の余地を生み出す。（中略）越境的対話を通して，自集団や他集団への関わり方，考え方，視点，思いや感情が，つまり主体の振る舞い方が変化を遂げる」としている。学習集団というコミュニティ，教師集団や授業研究会というコミュニティ，保護者や地域住民などの地域コミュニティなど「チームとしての学校」の一員として，多様な他者との関係性の中で，教師がどのように職能発達を遂げていくかについての研究が今後求められると考える。

引用参考文献

阿部隆行（2013a）若手教師の成長を支える私の試み――高校体育教師の成長を支え促すために――．体育科教育（6），42-45.

阿部隆行（2013b）保健体育教師の専門的力量形成に関する研究――熟練期の高校教師のキャリアヒストリーを手がかりとして――．埼玉体育スポーツ科学（8），45-50.

朝倉雅史・清水紀宏（2010）体育教師の信念に関するエスノグラフィー研究．体育・スポーツ経営学研究24，25-46.

朝倉雅史・清水　紀（2012）体育授業に対する教師の認識変容過程：小学校教師の長期研修を事例として．筑波大学体育科学系紀要35，165-181.

明石　愛・辻　延浩・加登本 仁（2015）小学校女性教師の職能発達に関する体育実践の力量形成過程についての質的研究．教職実践研究1，53-70.

秋田喜代美（1997）子どもへのまなざしをめぐって――教師論．学ぶこと・教えること．金子書房，pp. 51-73.

Armour, K. & Yelling, M. (2004). Continuing professional development for experienced physical education teachers: Towards effective provision. Sport, Education and Society, 9(1), 95-114.

中央教育審議会（2012）教職生活全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）.

中央教育審議会（2015）教育課程企画特別部会論点整理.

中央教育審議会（2015）チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）.

深見英一郎（2004）近年の米国にみる体育教師の効果的フィードバックに関する研究の動向．体育学研究 49（6），583-593.

飯野令子（2010）日本語教師の「成長」の捉え方を問う――教師のアイデンティティの変容と実践共同体の発展から――．早稲田日本語教育学（5-7），1-14.

狭間俊吾・原　通範（2013）教師も子どももともに「わかって」「できる」体育授業のあり方：5年生のシンクロマットの実践から．和歌山大学教育学部紀要．教育科学63，83-92.

林　伸晃（2011）小学校体育授業における教師の反省的思考に関する実践研究――アクション・リサーチの取り組みから見えてきたもの――．滋賀大学大学院教育学研究科論文集14，107-116.

平野和弘（2017）保健体育科教育法とアクティブ・ラーニング：教科保健「深い学び」としての対話の授業，

その実践と展開と考察．駿河台大学教職論集2，11-23.
香川秀太・青山征彦（2015）越境する対話と学び――異質な人・組織・コミュニティをつなぐ．新曜社.
加登本 仁・辻　延浩（2016）小学校教師の体育授業力量形成の契機に関する調査研究――指導的立場にある教員を対象として――．日本教科教育学会誌．39（1），35-48.
加登本 仁（2014）研究授業を担当する若手教師が直面する困難とその克服家庭に関する活動論的考察．初等教育カリキュラム研究2，13-21.
加賀はずき（2006）「運動嫌い」・「体育嫌い」について～教師と生徒の相互認識差に着目して～．仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集7，1-8.
木原成一郎・村上彰彦（2013）体育授業の力量形成に関する一考察――小学校教諭Aのライフヒストリーにおける体育授業観を中心に――．学校教育実践学研究第19巻，247-258.
木原成一郎・林　楠（2010）イングランドの現職教育に関する研究――リバプール・ジョン・モア大学のメンター資格認定に焦点化して．学校教育実践学研究16，105-116.
国立教育政策研究所（2013a）社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理．教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5.
国立教育政策研究所（2013b）諸外国の教育課程と資質・能力――重視する資質・能力に焦点を当てて――．教育課程の編成に関する基礎的研究報告書6.
厚東芳樹・梅野圭史・上原禎弘・辻　延浩（2004）小学校体育授業における教師の授業中の「出来事」に対する気づきに関する研究――熟練度の相違を中心として．教育実践学論集5，99-110.
久保研二・木原成一郎・大後戸一樹（2008）小学校体育科授業における「省察」の変容についての一考察．体育学研究53（1），159-171.
久保研二・木原成一郎（2013）教師教育におけるリフレクション概念の検討：体育科教育の研究を中心に．広島大学大学院教育学研究科紀要．62，89-98.
文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成29年3月公示）.
森　勇示（2009）体育授業における教師の実践的知識の形成過程――教師との対話事例を手がかりに．愛知教育大学教育実践総合センター紀要12，207-212.
森　博文・岸本　肇・廣瀬勝弘・栗原武志（2004）教職経験年数の違いによる授業観察時の思考の差異――同時発話プロトコルの分析から――．日本体育学会大会号55，602.
村井　潤・木原成一郎ら（2011）小学校教師が現職研修に求める機能に関する事例研究――体育科の校外研修の参加者に対するインタビューを手がかりとして――．広島大学大学院教育学研究科紀要第一部60，73-80.
中島憲子・黒川哲也・海野勇三（2002）体育授業研究における質的研究法の試み．中村学園研究紀要（34），51-59.
中村和彦（2008）アクション・リサーチとは何か，南山大学人間関係研究センター紀要．人間関係研究7，1-25.
野津一浩（2009）「教師の力量」の構造に関する予備的考察．兵庫教育大学教科教育学会紀要22，19-26.
岡崎敏雄・岡崎　眸（1997）『日本語教育の実習 理論と実践』アルク.
佐藤　学（1997）教師というアポリア．世織書房，pp. 57-77.
Schon, D. (1983) The reflective practitioner. How professionals think in action. Basic Books: New York.
清水紀宏（2007）学校体育経営における自律性と共通性．日本体育学会第58回大会体育経営管理専門分科会企画シンポジウム報告書.
下山田克也・吉野　聡・飯島悠輔・金川瑞希・杉江拓也（2016）保健体育科指導における初任教師の力量形成．日本体育学会大会予稿集67，296.
品田龍吉（2008）体育経営者としての保健体育教師を育てる．体育・スポーツ経営学研究22，9-17.
Stroot, S.A. & Ko, B. (2007) Induction of beginning physical educators into the school setting. Handbook of Physical Education.
須甲理生・岡出美則（2008）熟練体育教師の授業力量形成過程．日本体育学会大会予稿集，59，255.
須甲理生・四方田健二（2013）体育教師が有する教師観に関する一考察：運動部活動指導者としての教師観から授業者としての教師観へ．日本女子体育大学紀要43，41-50.

須甲理生・笹本重子ら（2013）教職1年目の保健体育教師における省察を通した授業に関する信念の形成：体育授業指導経験における転機に着目したインタビュー調査を通して．日本体育学会大会予稿集．64, 354.

住本　純・岡出美則（2013）現職教員が大学での長期研修で受けた経験：体育科の長期研修生を対象に．日本体育学会大会予稿集 64，358.

鈴木　聡（2009）小学校教師の職業的社会化において「体育科」の授業研究が果たすや機能に関する研究．日本教育社会学会大会発表要旨集録61，97-98.

鈴木　聡（2010）小学校教師の成長における体育授業研究の機能に関する研究．体育科教育学研究26（2），1-16.

鈴木　聡（2016）体育科を研究する小学校校内研究会における外部講師の存在意義に関する研究――体育・スポーツ政策の媒介者としての存在に着目して――．体育・スポーツ政策研究25（1）.

鈴木　聡（2016）小学校教師が体育授業研究に求める機能――教職歴に伴う変容――．体育科教育学研究32(2)，35-40.

塚田　守（1997）高校教師のライフヒストリー研究（1）中年期後の男性教師の聞き取りから．椙山女学園大学研究論集 社会科学篇 28，241-259.

山口孝治（2011）体育授業における教師の力量形成に関する実践研究――若年教師の実践的知識の変容に着目して――．佛教大学教育学部論集22，153-170.

山﨑保寿（2017）次期学習指導要領の改訂に備える学校経営の課題と展望：教育方法としてのアクティブ・ラーニングの効果的導入．学校経営研究42，29-38.

横山　彩・大熊誠二・阿部隆行（2014）体育教師たちの成長とアイデンティティの確立～校種を超えた学び合い．体育科教育62（7），58-61.

吉崎静夫（1994）デザイナーとしての教師 アクターとしての教師．金子書房.